論文の和文要旨

論文題目	イノニュの時代のトルコにおけるイスラーム派の出現とその意味
氏　　名	伊　藤　寛　了

アタテュルクの時代（1923－1938）の様々な急進的な政策によって世俗化主義体制が確立されていたトルコにおいて、表面的にはイスラームの影響力は殆どなくなっていた。では、一体いつ、どのようにイスラームはトルコ社会において重要性を持つようになったのか。背景には何があり、そのプロセスは如何に進行していったのか。どのような人々が関係し、彼らはその過程で何を論じていたのか。本論文はこうした問いに答えを探るべく、イノニュの時代のイスラーム派の出現を巡る諸相を検証するものである。

目次（節レベルは割愛）。

序章　問題の所在と研究視角
第１章　イスラーム国家から国民国家へ：近代化と急進的世俗化
第２章　イノニュの時代：イスラーム派の出現の政治・社会状況
第３章　道徳の頽廃・宗教教育・世俗主義
第４章　イスラーム派にとっての他者：無宗教・異教徒・アレヴィー派
終章　イノニュの時代のイスラーム派出現の意味

これまでの研究史の整理を行い、これまでの研究は政治的観点の研究が殆どであり、イスラーム派出現の背景は殆ど考慮に入れられていないことを明らかにし、出発点としてその点から行うことの必要性を明らかにした。そしてトルコ・ナショナリズムとイスラーム、更には保守思想の融合という近年の研究の成果に鑑み、イスラーム派の出現という主題においてもナショナリズムに注目することの必要性を指摘した。そして政府とイスラーム派の関係にも注意が払われる必要性を述べた。

オスマン時代の近代化の過程において、宗教という要素は社会いて果たす役割や重要性を逓減させていった。バルカン地域を中心としたナショナリズムの隆盛はオスマン帝国にも伝わり、第 2 次立憲期のナショナリズムはイスラームと一体化したものであった。アタテュルクの時代は西洋化の時代であり、世俗化の時代でもあり、それまでの生活スタイルに大きな変化が起こった時代であり、文化的革命の時代とも言える時代であった。服装、言語、文字、教育、法律、ほとんど全ての分野で革命な変化が起きたのであった。一部のエリート層を除けば、アタテュルクを中心とするトップダウンの強権的なやり方には違和感を覚える人々もいただろうし、世俗化に押されて宗務関係者は不遇を囲っていた。

アタテュルクからバトンを受けたイノニュが大統領に就任すると直ぐに第 2 次世界戦が始まる。イノニュは中立外交を取ったものの、それは逆に自分をトルコ一国で守らなければいけないことをもいみするから、軍事費は飛躍的に伸び、そのつけは税金や配給として国民にまわってくることとなった。しかし一方では戦争成金が発生しいたから、そういった人々に対する国民の怒りは強かった。そういた怒りを宥めるために政府は「富裕税」を実施したり、「農地分配法」を導入したりした。けれども国民の不満は物質的な不満だけではなかった。心にぽっかりと穴が開いた、精神的な満足感を得られない生活をしていた。農民の生活における神秘主義教団の重要性はしばしば言及されることであるが、神秘主義教団の系鎖に加え、学校での宗教教育も廃止になっていたから、国民は宗教的なものに日常的に触れる機会は非常に減っていたはずである。

それを示しているのが第 3 章で見た『ミッレット』の国民へのアンケート調査であった。それによると国民はほぼ全員宗教教育の再開を求めていた。その背景となっていたのが、道徳の頽廃という社会の共通認識であった。そしてその道徳の基盤となるべく期待されたのがイスラームであった。社会におけるイスラームと道徳の頽廃が同じ時期に起きていたから、それらを関連付けて論じたり考えたりすることはムスリムのトルコ人にとっては風であったはずである。それを早くから行っていたのが『偉大なる東方』であった。そして国民的な要望を基に、また他方では民主化の流れに乗って宗教に関する政策は次々に実施されていった。第 2 章で議員や党員が自分たちの論を展開するときの共通点は「我々はムスリムなのだから」、「非ムスリムはできるのに」、「西洋でも」、「世俗主義は無宗教ではな

い」といった議論の仕方であった。この立論は国民のそれとそれ程違いはなかった。言い換えれば、政治家が求めるものと、国民が求めるものにそれ程の差異はなかったということである。

こうした世論における議論の符号は、単なる偶然の一致ではなく相互関係の中で形成されていったものであり、複数政党制への移行による政治文化の変容をいみじくも示しているだろう。それまでの一党支配体制における「上から統治される国民」から「物言う国民」へと変貌していったのであった。そうした政治文化の変容は党内の宗流派の陣容の変化ももたらしていた。つまり強硬派から穏健派への変化である。

「イスラームが高揚」してくるということを「押さえつける」というのではなくて「民意の現れ」ととらえ、宗教というものの捉え方がそれまでと異なる人々が与党の中で主流派を形成していったのであった。そしてその背景には、民衆レベルでの動きや、民衆を含む形での言論活動があった。それらが受け入れられる背景には、「道徳の頽廃」という社会的な一般認識があった。それは、1943年の第2回教育評議会で道徳教育が最も重要な論点の一つでありことからも分かる。そうした道徳を巡る議論の背景には、「自分とは何者なのか」＝“benlik”（私であること）という言葉が保守的な知識人の論説において中心論題として取り上げられていた。例えば、「自分とは何者なのか」と問うトプチュは、アタテュルクの時代は「実証主義」、「欧化主義」、「物質主義」であったと振り返り、批判する。そしてそれにとって代わる「トルコ的」で「精神的」なものを模索する。模索の先に彼らが見つけたものが宗教、即ちイスラームであった。

嘗ては彼らのアイデンティティンの中で枢要な位置を占めていたはずのイスラームが欧化主義全盛の世の中においてその重要性を失ってしまったことにより、我々の道徳は頽廃してしまった。このように保守的な知識人たちは考えた。その象徴がハリウッド映画であったり、街を練り歩く洋風な「ハイソな女の子」たちであったり、スポーツをする女子学生であった。こうしてみると、道徳の頽廃において「女性」というもの一つの重要な「象徴」としての役割を果たしていた事が分かる。ここには、単にイスラーム的な価値観というだけではなく、家父長的な男性優位社会の価値観を見て取る事が出来るだろう。そうした「家父長的」、言い換えれば「保守的」乃至は「伝統的」な価値観が、ケマリストたちが目指した女性の社会進出、現代的な女性像の中にあって尚根強くあったことを示している。とともにその保守的な価値観は、「女性はみだりに肌を露出せず」といったイスラーム的な価値観とも親和性があるものであり、「欧化主義」が「道徳の頽廃」と結びつく広範な素地がここにあったのである。

それらを広く言論界の俎上に載せたのが、本論文で見てきたトプチュ、クサキュレッキ、

ドールル、クタイ、フェルガンといった人々であった。イノニュの時代のイスラームの高揚は、これまで「イスラーム復興」を分析する際に主に対象とされてきたエシュレフ・エディップのみによるものではなかったことはこれまでの検証から明らかであろう。例えばアレヴィー派の問題では『安寧』の役割は看過できないものであったはずである。更にいえば、イノニュの時代のイスラーム高揚を思想的に支持していたのは、単にエシュレフ・エディップ・フェルガンなどの所謂「イスラーム派」のみではなく、ナショナリストや保守的な言論人など多岐に渡っていたのである。それは本論文ではその全て網羅することは出来なかったが、ナショナリスト的大衆紙から、トルコ主義雑誌、そしてイスラーム派の雑誌までを分析の対象とし、そして当時のイスラーム教育の教科書やイスラームについて書かれた書物やパンフレット類なども参照し、他方で、当時の与党の中枢にいたエリムの日記や公文書を用いることで、イノニュの時代のイスラームの高揚の諸相を記述するという研究上の空白を少しでも埋めることができたはずである。

そしてこれまでの論述から、「イスラーム高揚の意味は何だったのか」という問いに答えるならば、次のようになるはずである。それは「トルコ的イスラーム」の誕生ではなかったか。世俗主義体制が確立された中で、イスラームを巡って議論が展開されるという状況。その議論の内実が「世俗主義とは何か、その範囲はどこまでか」というものや、「世俗主義は反宗教ではない」、「トルコ人はムスリムであり、イスラームを信仰することは必要である」というものである。そして「世俗派」と「イスラーム派」そしてそれを支持するイスラームを重視する保守的な人々との間で行われる論争。こうした風景は今に至るまで殆ど変わることがない。更にオスマン帝国末期の思想と「トルコ・イスラーム総合論」の間を繋ぐミッシングリンクの役割を果たしたのがイノニュの時代のイスラーム派とその周辺ではなかったのか。このような問いに答えていく事が今後の課題となろう。